



大槌の歴史

大槌氏をめぐるナゾ第一回

大槌城跡、すなわち大槌の「お城山」が、昨年九月に岩手県指定文化財（史跡）に決定されました。県の「指定文化財」とはいつても、

それは多くの人々にとつては、あまり馴染みのない言葉であるかもしれませんが、そして直接的に利益・損失に関わりもなさそうなことであれば、聞きながされ、間もなく忘れさられてしまうのも世の常のことなのかもしれません。

「国宝」という言葉ならば、どなたでも理解できるでしょう。わが国に存在する「宝」として、国民みんながダイジに思い、のち後の世代に譲り伝えていくことに誰も疑義を感じない文化財が、国指定の文化財であり国宝であるわけです。この国宝にあてはめて考えた場合の県の「宝」が、県指定文化財であると考えていただければわかりやすいと思います。

では何故に大槌城跡が、岩手県指定文化財（史跡）ということにな

ったのでしょうか。県内には中世（戦国時代）以降の城（および館）跡として認められている遺跡が千五百か所以上あります。そのうちで県指定以上の例は次の三か所にすぎないのです。

国指定史跡 盛岡城跡 盛岡市
 国指定史跡 九戸城跡 二戸市
 国指定史跡 大槌城跡 大槌町
 何故に大槌城跡は、県指定史跡として特にとり上げられたのでしょうか。

さて標題の「大槌氏をめぐるナゾ」に入っていく前に、やはり大槌氏と大槌城とについて、一通り述べておく必要があります。

七百年程もムカシ、遠野（現遠野市）の領主は阿曾沼氏で、その領有する範囲は、いわゆる遠野郷はもち論大槌・釜石などの海岸部にまでも及ぶ広大なものであったようです。しかし広大なだけに、

その範囲内にあまねく善政をし、ことは、当時とすれば誠に困難なことであったにちがいません。山田（現山田町）方面に盗賊があらわれた節に容易に鎮定できなかったというようなこともあったようです。なにしろ電話もなく、仙人トンネルもありません。沿岸部に通ずる道路は荷車を牽くことなどできない、人や馬が何日かをか

けてようよう歩ける程度のものであったにちがいないのですから。建武から正平年間の頃（西暦一三四〇年頃）、阿曾沼氏は、沿岸部の円滑な統治のために、次男遠野次郎を配置、常駐させることとしました。次郎は沿岸の領内を見まわした上、大槌の地を選び、最も軍事・経済の中心地となり得る場所として城を構えることとしました。これが大槌氏と大槌城の発

生となります。

遠野次郎は、大槌次郎を名乗って初代の大槌城主となりましたが、それから約百年後の永享年間（一四二九）の城主は大槌孫三郎でありました。平均的には一家の主人は二十五年程度でその息子へ代を譲っていくものですから、孫三郎は四々五代目の大槌城主であつたかと考えられます。

この孫三郎の時代に、大槌城は南部守行の大軍勢に攻められたといひます。南部氏は後に盛岡に盛岡城を築いて南部藩（盛岡藩）だいたい現在の岩手県の範囲の藩主となる大族ですが、当時は三戸に城を構えて本拠地としていたとされ、守行はその十三代の殿様であつたそうです。この戦いは「永享の乱」と名付けられています。諸書には大槌城のことが次のよう

に記されてあります。

「（大槌城は）滄海を前にし、高山を後にして、大槌・小槌の二川を左右に、城をその中央に占め、これを攻めれども陥らず」

「守行、直ちに釜石へ攻め入り（中略）勝ちに乘じて大槌へ押し寄せ、小槌川を前当てとして所に陣取り、追手（正面）、搦手（裏側）一同に攻めたりけり。城中（の）兵も小槌川を関所として、矢先きそろえて防ぎければ、所は屈竟の要害、後は峨々たる山に続き、前は満々たる荒磯にて千尋たため所なれば、守行公も攻めあぐんで、和談にこそしたりけり」

実は大槌城攻防戦のさ中に、攻め手の総大将南部守行が頓死して、

ものと、病死であつたとするものとの二説があります。いずれこの時以降、大槌氏は南部氏の下に属することとなります。

大槌氏の滅亡は西暦一六一〇年代です。その発生の一三四〇年頃から約二七〇年間を数えます。先程の計算でいきますと大槌氏は約十代も栄えたことになりました。うか。孫三郎以後の数代の城主は、各代とも孫八郎を名乗って勇武の名声高く、その内容は次回以降に述べるつもりです。また大槌氏の政治手腕の一面を伝えてくれるような、次の文章があります。

「（大槌孫八郎は）他郷におちぶれ居たる浪人へも時々財宝を与へて貧苦の憂いを救い——領内近き他郷の百姓漁師共へも金銀、米銭の借物を願ふに安利に貸しつかわし、返済の力無き貧民を責め苦しめず、慈悲を専らにして貸し出し——憐愍をもつて懐服し隣郷の村々自然と手に入り、倍々勝手潤沢になり——遠野家中にて随一の人



南方より望む大槌城跡

そのために和平交渉に移行したといひます。守行の死因は、大槌側からの流れ矢にあつたとする

第一回終

文・町文化財保護審議会委員

花石 公 夫 さん

